

複合名詞の学問名を信用しない

島津康男

情報・環境をつけると予算がついた時代あり

そこで経営情報・環境ソリューション etc.が生まれたが、
中身はバラバラ

私自身の出身の地球物理学もその一種で、戦時下の技術将校の育成が目的（軍服を着た教授も）

地球科学のニューネーミングに憧れて名古屋大学に来たが、
現実には中身がバラバラ

そこで、**シームレス**（縫い目なしの自然）の概念を基本にしようと考えた

一時流行した「学際」も曲者

- よくて「スキマネライ」、実態は共同研究と称しての予算とり
- そこで「一人(で)学際」を主唱
- 縫い目のない自然は「一人学際」で攻める他なし

そこで考えたのが「環境の現場監督」 1960年代の終わり

- 村の自然と村に住む人が先生だ
- 開発現場に住みこんで、水質・地質・生物を身の丈科学で連続観測、前兆を見つけて予測・対応、法律の知識も必要
- 人と自然の通訳(木は何を訴えてる)・事業者と村人との通訳を果たす (合意形成の手伝い)
今でいう環境アセスメントの走り
- 犠牲になった元学生がこの席にもいる

学問は好奇心とその社会還元の 両輪ではないだろうか

- この意味で、予知と予測がごっちゃな「地震予知」に手を出す気にならなかつた 特に自然相手には謙虚に
- 地震予知連は全員頭を丸めて社会に詫びるべきだ
- つまり両輪のためのツールがちゃんとしていること

私はツールとして五感と情報機器を重視する

- 道具としての「情報収集」「情報処理」「情報発信」を忘れるな 1960年はじめにはコンピュータによる自然現象のシミュレーションに凝ってつてもいた
- 名古屋大学時代は、理・農・工・法・経済でも教えており、一人学際を実践し、「大型計算センター長」もしていた
- 東邦短大学長の時は、日本ではじめて学生全員にパソコンを持たせた（得体の知れない徴収設備費をこれに投入）

現場監督と道具としての情報学は 矛盾しない

- 今でも反省しているのは、全面核戦争の
アセスメント、核融合のアセスメントをし
たこと
- 編集者が薦める「市民のための環境ア
セスメント」でなく、「市民からの環境アセ
スメント」の書名に固執したわけをわ
かってほしい

今の私の本職は「アセス助っ人」

- どこにでも駆けつけて、住民の情報格差を助ける 土地勘をつかんだ上、矢作川では「住民投票ゲーム」「藤前干潟」(1998)ではSSNの活用、「万博」(2002)ではTV公開WORKSHOPを活用
- 現在は「普天間基地移設」「日韓トンネル計画」に走り回っている 皆さん、地図を見て沖縄本島と対馬が形も大きさもよく似ていることを確かめてください それなのに、人口は140万対3万 なぜでしょう これが助っ人の第一歩

明治時代に日本海軍が開いた水路(幅50m)



- 宮本常一「私の日本地図」の視点よりタモリの「ブラタモリ 坂道美学」の方が好き なぜかわかりますか？
- 「アセス助っ人」の英文版（JICA国際研修用）あり 拡散自由
事業の種類・規模、立地場所の環境から何をどのレベルでアセスすべきかを質問すると、interactiveに教えてくれる自己学習システム事例集でもある
コンピュータを持っている人には今日でもコピーしてあげます
- これでもSPSに入るでしょうか？